

人が輝き活力と幸福を実感できる 海・山・空 夢ひらくまちづくり

陸・海・空に開けた 交通の要衝・三原市

平成17年3月、旧三原市、本郷町、久井町、大和町の1市3町が合併して新生・三原市が誕生した。合併の結果、三原市は広島空港、山陽自動車道、山陽新幹線、瀬戸内海に面した港湾を併せ持つ、文字通り「陸・海・空の交通の要衝」となった。

「本市は旧三原市時代から陸と海の交通の要衝でした。陸では山陽自動車道、JR山陽新幹線とJR山陽本線・呉線の各停車駅、海では瀬戸内海の島々や四国とも定期航路で結ばれる三原・須波港、さらに物流基地の性格を持つ重要港湾尾道糸崎港がありました。新生の三原市は、この瀬戸内沿岸に開けた市域に、広島空港を有する本郷町、豊かな山林や農業地帯を有する久井町、大和町という空の玄関と自然豊かな山間部、優良な農業地帯という新たな宝を加えたのです。」

現在整備中の国道2号三原バイパス、山陽自動車道および中国横断自動車道・尾道松江線と、広域交通拠点の広島空港を結ぶ広島中央フライトロード、中心市街地と新たに加わった北部各地区とを結ぶ県道三原東城線恵下谷バイパスなどが完成すれば、三原市の交通拠点はさらに高まります。

三原市では現在、こうした交通の要衝としての特徴を生かし、「一人ひとりが輝くまち」「幸せを実感できるまち」「活力を生み出すまち」を基本理念とするまちづくりを行っている。キャッチフレーズは、「海・山・空 夢ひらくまち」である。

「現在の各地区はもともと鎌倉時代から戦国時代にかけて、後の小早川隆景で知られる小早川氏の影響の下に一つのまとまりを持つ地域でした。その後、三原市周辺地域は、根底の部分で深いつながりを持ちながらも、近代以降、工業を中心に発展した三原地区、農業



五藤康之
三原市長

を中心とした本郷・久井・大和地区が、それぞれの特性を生かしたまちづくりを展開してきました。『海・山・空 夢ひらくまち』というキャッチフレーズは、これらの各地区がそれぞれに持つ伝統ある祭り、臨済宗佛通寺派の大本山「佛通寺」や御調八幡宮といった歴史的建造物から豊かな自然に至るまでの多彩な魅力と人・物などのポテンシャルを高速交通網で結び、同時に各地区のマンパワーを結集することで、市民の誰もが健康で、安全・安心に暮らせるまちづくりを目指すための合言葉でもあるのです」

交通インフラ整備を進めて 拠点としての優位性を高める

市長の言葉にもある県道三原東城線恵下谷

バイパスの整備事業は、地形的に山間部によって隔てられている北部各地区と旧三原市地区をほぼ直線的に結ぶ「南北軸」の完成を意味する。

この県道三原東城線恵下谷バイパスを含めて、交通拠点としての優位性をさらに高めるために進められている、交通インフラに関する主な事業は次の通りだ。

(1) 一般国道2号三原バイパス・木原道路
国道2号ならびに市内の交通渋滞の緩和、

良好な都市環境の形成を図るとともに、周辺都市との広域的な交流連携を強化するための整備促進。全通すると三原バイパス(糸崎町〜新倉町)の総延長は9.9km(4車線)になる。三原バイパスとつながる木原道路(尾道市福地町〜糸崎町)は総延長3.8km(4車線)で、両者の結節点である糸崎町には事業面積約1万7600㎡の道の駅が建設される予定だ。当面、平成20年代前半の暫定2車線による三原バイパスの供用を目指している。

(2) 広島中央フライトロード

山陽自動車道と広島空港および中国横断自動車道・尾道松江線を相互に連絡する、約30kmの地域高規格道路(本郷町〜世羅郡世羅町)。この道路の完成で広島空港の拠点性がさらに高まるほか、沿線の地域活性化促



広島空港に向かう広島中央フライトロードのシンボル・空港大橋も完成間近



三原・須波港から瀬戸内海各島に出発するフェリー



小早川隆景が1567年に三原城を築いたときから始まったといわれる「やっさ祭り」は夏の風物詩

「佐木島は、美しい海と白砂青松、季節ごとに実るミカン・ハッサク・レモンそしてメロンなどの豊富な果実類、海辺の動植物の宝庫である干潟など、旅行者を引きつける魅力に事欠かない、本当に天国のような場所です。三原市内には県立広島大学保健福祉学部のキャンパスがあります、大都市圏からこの大学に赴任してきた先生の中にも、佐木島に住まいを希望する

現在実施されている水道事業は、このような地理的条件、気象条件下にある三原市ならではの特徴的な事業の一つである。「豊かな自然と美しい景観に恵まれた三原市では、自然に優しい環境共生型の生活の実現とともに、質が高く、防災面にも優れた快適で安全・安心な居住環境の整備されたまちづくりを目指しています。独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)の地域新エネルギー導入促進事業の補助を受けた太陽光発電システムを備える西野浄水場は、その象徴的施設といえます(五藤市長)

西野浄水場は「人と環境に優しい施設づくり」をコンセプトとし、平成16年3月に竣工した。人と環境に優しいゆえんは、緩速ろ過方式の池、太陽光発電、タンクおよびステンレス製のタンク・配水池の採用、さらには庁舎・備品などにおける環境への配慮に表れている。西野浄水場を集められるのは市内を流れる

だろ。こうした土地柄を背景に、観光・交流面の活性化についても、瀬戸内海有数の景観、城下町としての歴史、山間部の緑、農業地帯の農業体験、さらには山・海・里の幸を中心とする豊富な食材などをセールスポイントにし

た情報発信がこれから積極的に推進される予定である。中でも三原市域唯一の離島である佐木島の存在が注目される。瀬戸内海国立公園の景勝地である筆影山・竜王山から見る多島美は瀬戸内海随一とも言われているが、その眺望の最前列を占めるのが佐木島である。そこでは毎年8月に島を挙げて行われるトライアスロン大会が全国的に知名度を上げつつあるが、最近では、大都市圏からの定年退職者の移住好適地としても知られつつある。

過去の震災被害の教訓を生かした 三原式・水道事業を展開

方がおられます(五藤市長)

前述したように三原市は「瀬戸内海式気候」特有の温暖、少雨、多照型の気象条件下にある。佐木島がかんきつ類を豊富に産する理由も、こうした気象条件が大きく影響している。半面、台風被害や異常渇水などの経験を幾度も余儀なくされてきたことも瀬戸内海式気候の影響だ。



緩速ろ過方式など環境に優しい設備を持つ西野浄水場



西野浄水場の電力は840枚の太陽光発電モジュールで電気代を大幅に節約

陸海空の拠点性を生かした 多彩な活性化事業

三原市の交通拠点としての優れた地理的条件は、とりわけ企業立地の面で真価を発揮している。例えば三原市内には現在、広島県営の企業団地が4つある。このうち三原西部工業団地(小原地区)は全区画が埋まっており、残りの、大和工業団地、三原西部工業団地(惣定地区)、久井工業団地の3つの工業団地が分譲中である。

しかし、未分譲地は大和工業団地、久井工業団地とも各1区画だけ。造成完成が平成8年12月と最も遅かった三原西部工業団地(惣

広島空港は標高が高い台地上にあるため、霧が発生しやすい。高度計器着陸施設(CAT IIIa)は、濃霧飛行を可能にする高性能の計器着陸システムである。平成20年度に設置済み。

(5)重要港湾尾道系崎港湾施設整備事業

尾道系崎港のうち松浜地区では三原内港地区に係留する小型貨物船の収容と、物流機能の充実強化を図るため、港湾施設の整備が進められている。本事業は市街地の「住工混在」の解消を図る上でも重要な事業と位置づけられ、現在、公共埠頭や臨港道路などの港湾施設および港湾関連用地などの整備が行われている。貝野地区においても、港湾工事が発生する浚渫土を活用して護岸工事を行い、用地が造成されつつある。



瀬戸内沿岸で獲れるタコは三原市を代表する海の幸

定地区)もシャープの電子部品事業部がすでに立地し、今後は先端産業が集積するハイテク団地としての役割が期待されている。

各工業団地とも、広島空港・JR三原駅・山陽自動車道・三原港からそれぞれ至近な陸・海・空の交通結節点に位置し、その利便性に富む立地が企業に評価されている。

また三原市とその周辺地域は、縄文・弥生・古墳時代の遺跡が豊富なことでも知られている。これは温暖な気候と雨の少ない気象条件、豊富な漁獲が約束される穏やかな瀬戸内海、沿岸地域を貫く山陽道と海上交通の利便性など、同地域がはるか古代から、暮らしやすい土地柄として知られてきた証しといえる



芸術文化センター(ボボロ)の客席



三原市の文化振興の拠点・芸術文化センター(愛称ボボロ)

例が多い。老人大学をはじめとする充実した生涯学習事業、子育て支援、市民の健康づくりの推進、地域福祉・社会福祉の充実ぶりにも目を見張るものがある。平成22年度を目標に全市域に敷設が進みつつある光ケーブル網を活用した情報基盤整備事業も、地域情報高度化を目指し、地域活性化につながる注目すべき事業である。

そうした多角的かつ多彩な地域の活性化事業と並行して、平成17年3月の合併以来、五藤市長が最も心を砕いてきた目標を挙げるとすれば、それは市民の一体化の促進だった。

これまで述べてきたように、合併によって三原市は臨海部、山間部、農業地帯などそれぞれに個性を持った地区が一緒になった。三原市では現在、それぞれの地区の個性的な歴史・文化・自然を、高速交通網でネットワーク化し、高度情報化を進めることなどで、すべての人々が生き生きと暮らせるまちづくりを目指しているわけだが、市民の一体化にはやはり直接的な交流と触れ合いが不可欠だ。

「そういう意味で私が合併以来、最も時間を費やしてきた事業の一つが、各地区を訪れての市政懇談会の開催でした。市長と市民が直接意見交換する場としての市政懇談会はどうなるか、合併によって自分たちの地区はどうなるのか、新生・三原市としての将来的な方向性はどのようなものなのかについて語り合うことの重要性は、この4年間、私が市長として最も意識してきたこと



紺碧の海に展開する瀬戸内海の多島美は三原市を象徴する景観

した。

幸い市民の皆さんの理解を頂き、この春から新生・三原市としての2期目の市政がスタートしました。今後は実施途中の各種活性化施策を精力的に進めるとともに、「緩速ろ過方式の浄水システムでつくる『おいしい水』」のように、急がず、じっくりと各地区の皆さんとの対話を重ねていきたいと考えております(五藤市長)

一人ひとりの市民が輝き、幸せを実感することができ、活力に満ちた「海・山・空夢ひらくまち」を目指す三原市の今後の展開が、さらに楽しみである。(取材・文 遠藤 隆)



全国から参加者・観客が集まる佐木島で毎夏行われるトライアスロン大会

沼田川の水だ。取水された水はまず「緩速ろ過方式」の池にためられ、細かな砂の層に1日4〜5m程度のゆっくりした速度で通される。ゆっくりとろ過することで、砂層に存在する微生物により不純物・細菌を取り除くことができる。このように自然の中で雨水や雪などが長い時間をかけて良質な伏流水になっていく過程を人工的に再現している。沼田川の水がもともと良質であるからこそ実現可能な方式だが、「三原市の水道水はおいしい」という評判の秘密もここにある。もちろん安全な水を実現するためには、ろ過後に塩素を注入する必要があるが、これも最低限にとどめられている。

また、太陽電池モジュールを設置し、太陽光エネルギーを電力に変換し、浄水場内の動力施設や、庁舎の使用電力の約15%は太陽の光というクリーンなエネルギーを利用してほかに、塩素注入設備にチタン製タンクを使い、ろ過後のきれいな水をためる配水池の材質もステンレス製にすることで、いずれも高耐久性であり、将来その役割を終えても多用途への転用(無廃棄)が可能になっている。

「西野浄水場の隠れた真価は、災害時に發揮されます。例えば災害による停電時にも西野浄水場が標高70メートルの高所に設置されているため、市内の西部・東部にある基幹配水池に高低差を活用した自然流下方式で水を送ることが出来ます。主要施設には自家発電設備を整備してありますので、併せて良質な水



JR三原駅に隣接する小早川隆景が築いた三原城天守台跡

が確保できれば、災害時にも市民は安心して生活を送ることができます(五藤市長)

三原市は平成13年3月の芸予地震(震度5強)に際し、市内全域で水道施設が大きな被害を受けた。幸い3日で復旧したものの、水のない生活のつらさを体験した。この教訓から、西野浄水場の先進性だけでなく、三原市水道部では水道管の耐震化、全域給水停止を防ぐための給水区域のブロック化、応急給水所の常設化などさまざまな事業を実施している。

**市政懇談会から得た声を踏まえ
じっくりと市民と市政の一体化を目指す**

三原市の実施事業には、ほかにも優れた事